

## 8 今でも碧海郡出身力士の最高位に輝く毘沙門天の生まれ変わり

きよみがたまたいち  
**清見 瀧又市**  
(1838~1900/大浜)



### 1 20歳で江戸相撲に入門

相撲取りの五代目清見瀧又市は、天保9年(1838)、三河国碧海郡前浜新田(現 碧南市前浜町)に生まれた。本名を榊原幸吉(後、井上姓に変わり、通称は又市)といい、実家は農家であった。

地元棚尾の玉伝という親分の元で土地相撲に参加し、三代目清見瀧の弟子の目にとまった。安政5年(1858)、20歳のとき三代目のもと江戸相撲に入門した。安政7年(1860)2月、22歳で「江戸」頭書・関谷川幸吉の名で序の口につき、初めて番付にのった。当時としては年齢が高いほうだった。万延2年(1861)2月には序二段に昇進し、文久2年(1861)11月、新の海(新ノ海)と改めた。翌3年7月に下の名を幸蔵に改め、同年11月に三段目と地道に番付を上げていった。元治元年(1864)10月下の名を光蔵、慶応元年(1865)11月幸吉、同2年3月幸蔵に戻し、3年11月に幕下二段目に上がった。

### 2 毘沙門天のように強くなりたい

この間、師匠の三代目は隠居して、兄弟子の三代ノ松が四代目を継承、彼もその門下となった。

新幕下の場所の5日目に志貴ノ海幸蔵と改名した。これは郷里の志貴毘沙門天(妙福寺)から名づけられたもので、毘沙門天のように強くなりたいという願いが込められている。

明治2年(1869)3月「東京」頭書となり、同年11月、幕下三枚目に昇進し、菊間藩のお抱えとなり、番付頭書も「キクマ・菊間」と変わった。

### 3 西尾出身の深柳を抑えて、五代目清見瀧又市を襲名

この年の12月、四代目清見瀧が死去した。三代目より清見瀧部屋を継承してからわずか6年間という短期間であった。ここで、部屋の継承争いが起こったのである。当時有資格者は、十両の深柳鉄蔵と幕下三枚目になった志貴ノ海幸蔵の2人であった。

深柳は初名を金挺(きんてい)といい、西尾の出身であった。安政4年(1857)頃、三代目清見瀧の弟子になり、文久3年(1863)幕下へ昇進した。早くから西尾藩御用達の木綿問屋深谷半左衛門の庇護(ひご)を受けていた。明治2年(1869)4月幕下三枚目のとき、深谷家に因んで「深柳」と改名し、番付頭書も「西尾」となり、西尾藩お抱え力士となった。しかし、深谷家はこの当時家計が思わしくなく斜陽となっていた。

一方、志貴ノ海の故郷棚尾には、瓦屋経営の永坂壱兵衛という勢いのよい商人がいた。当店は早くから京都で優れた技術を身に付け、天明年間に初代壱兵衛は、棚尾村で瓦製造に成功し、大浜湊から各地に売り出していた。当時は四代目で隆盛を極めていた。

この後援者である永坂家の資金力と人望、人柄などから、翌場所(明治3年11月)には志貴ノ海は、正式に清見瀧又市を襲名した。

#### 4 突き押しが得意で、立ち合いに大声を發した名物力士

明治6年(1873)4月、先輩の山分(深柳が改名)の引退と交代するように、35歳で又市は新入幕を果たした。初番付から14年目であった。長身で筋肉質のがっしりとした骨太の体格で、身長6尺5寸(198cm)、体重20貫(75kg)と伝わるが、やや信憑性に欠ける。変化のある突き押し(突っ張り)を武器に、ときには無双を切ったりする取り口をした。その突っ張りの強さに相手が肋骨を折り、しばらく禁じ手にされたという話も残っている。また、立ち合いに、相撲場の外にまで聞こえるほどの大奇声を發した名物力士として知られた。

#### 5 44歳で前頭筆頭に、47歳まで現役を続けた

その後、徐々に番付を上げていき、明治15年(1882)5月、44歳で前頭筆頭に躍進したが、これが五代目清見瀉又市の最高位であった。この前頭筆頭という番付は、六代続いた清見瀉の中でも、また、碧海郡出身の大相撲力士の中でも最高位にあたった。(現在でも碧海郡出身者の中では、最高位)大物には勝ち目がなかったが、大関朝日嶽を倒し、大関境川と3回引き分けている。

幕内総成績は、65勝83敗27分8預であった。成績の上では平均的な幕内力士だったが、驚異的な持久力で土俵を湧かせた。そして47歳になった明治18年(1885)5月限りで引退した。幕内在位は、13年間(計29場所)の長きにわたった。

#### 6 帰郷すると、子ども達に思いっきりぶつからせた

引退後は年寄り専務となった。明治22年(1889)、相撲会所の名称が東京大角力協会と改称され、規則も整理され役員制度も厳格になった。その結果、清見瀉は勝負検査役に抜擢された。その後勸進元(当時は願人)になったり、明治30年(1897)の役員改選時においても再選されたりしている。

郷里の生家は、清見瀉の実弟梅吉が跡を継ぎ、棚尾で「福住屋」という製麺業を経営していた。巡業の合間に清見瀉が帰宅すると、玄関が上がったところで蹲踞(そんきょ)の姿勢をとり、子ども達に思いっきりぶつからせたと伝わっている。

#### 7 多くの三河出身力士を育てた

清見瀉の本墓は、東京六本木の教善寺墓地に、四代目清見瀉に続いてある。また、棚尾の西山共同墓地には、明治11年(1878)に清見瀉が建立した両親の墓がある。

なお清見瀉部屋は元来三河出身が多いが、五代目は更に多く弟子を集め隆盛した。彼は先代の養子になり榊原姓から井上姓に替わっている。地方門人の出身地は、西三河一面に及んでいる。

五代目清見瀉又市は部屋を過去最大に繁盛させただけでなく、三河近辺の土地相撲の組織を大きく育成したのである。

#### ◆もっと知りたいなら

・『清見瀉又市と碧南の相撲』

(平成17年度・文化財展資料・杉浦明)